○雪小町之図○通小町之図○雪中織女○婚礼之図説

百人一首

女教訓色紙文庫

全

○女教訓至盥○嫉妬糸桛図○視聴言動図○女實語教

百小町
小町が双なく美人ことふるのろよ
勝れば大美人なれども中にも源
氏のおわ命張り
に恋しき乙女小町も
さぞかしひめ車の
りて百夜かるのもひ
のとあざむきなり

七夕祭の車
七月七日の秋雲年
織女の二星契と
ひとびのふし
秋二星成
ありて
ひをくける
車かな
せとと
いつくしま
わまの川
ふ
こころ
七夕れ
乙乃
夜の
久ふ
紬
も

婚礼之図説

夫男女夫婦の四さらひを婚姻とふい嫁入の礼いれを聘とるゆゑ女菊に入るといふ字をさうゆゑ女夫ようよりちかしあなる沙人ふ姻乃字ハ月四因いるたちかしたよりうふい婚礼といふ因しゆゑ礼の門ハ大綱そ人倫の始なれいなる大切なり

弾ゆゑ夫婦と要そそ他人とそしめてのそれ結ひまぐれ
ひまちき幸なり古夫を
よくちう考る人ハ仮法式
同くちう考ハ一ハ式法
古夫いこ者ぐ者とハ人と
弟の分限お要ハれそうう
ふべ一祝ゑの時ハ去のくち
るうるあきるくさひうと
ちあまぬ者の祝をいひ

女教訓宝鑑

そもそも女は生まれの家を我家とする心にて嫁入すると嫁する
こゝろ深くもいつくしまれて
生まれの親を我父母とすることの
うれしがりて舅姑に孝行
をつくすべきなり也不孝か
る女は人にあらず人ものこゝ
ひめれば才一よりをつくべき
なり孝行の徳あるゆへ

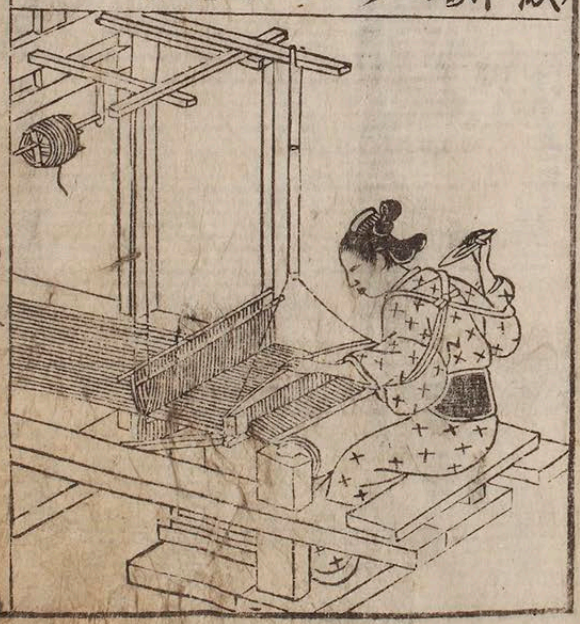
舅姑あるときは朝夕に食もち
ゆ丁寧にかしづき他人よりわ
れく家家に孫繁昌する
事こゝろ孝行の徳と仏
神のめぐみある也人うさ
きび人くとげこつとしぎ
るるると今世にあくに
ゆえにあるものの中よ
きに相性のうちなりなく
ふい大なるひごとなり

女の標とたてるて貞節とも
守節ともいふ信とこれを第
女房といふをいさくうと
きの面法ふかわ心天地の
面法とて別巻彩の一口女
ひとりい嫁してその夫一人
ようかの男ゆゑえぬりの
ようされい宮殿中も貞女あ
夫にはゆゑえども宮居三夫ようた
くずといふかりよくかり

ふ成いうだようくていろ
ケりる弟わすく夫と大切に
ゆりしいうるることわりとも
わかるりのりるもるりく
してゆんきんみるやまひて
一生つるるる女の者ゆり
ゆりにも弟の男の客後の
ようわれいさかどちて
きまへるいびゆりに苦ともる
人を貞女といふゆり

○蚕の糸をとるいとぐち伝授をして巻るうち繭とり出してそこを
ちゝくとあの出来るといとぐちの
ゆゞけしといふまとりおこな
こゝかりふまるこゝとみくこのづ
のくちらしてものわりそれをこれ
ても糸にするなりいと裏とる
ゆゝふゆふもうひこのいとく
よりうとのとりたる糸をこ縒車
みくこりこをてなるなり

○機織唐土黄帝の后そゝめて織
のこ我朝にてこの地神第二代の五神
忍穂耳尊の五后くゞけこち姫
そゝめて機を織いゝこのくよう
女の業とおれりこ代おるこくい
黄帝七代神百歳なり其
毛津といふもの浦りこそのほ呉の
国より兄媛弟媛呉織穴織とそこ
人の女を先して織ひのゆ伝法
人おそこ出ひこと



視

眼は一身の
総ての方
物をみると
善悪とを
悪とをと
ろを目の
清浄とふ
ほうしやべー

聽

耳は法の妙
と世俗乱
不浄乃
声をなは
悪仏を
ろをも
すかとち
けがをかり

言

云架は女の
半一分
低ふも
悪をいと
ざる紙口の
清浄とん
善仏なべー

動

一身をふ
動といふも
善悪の
ろろあり
少も邪
ろべるべ
仏ろは神
仏の所要ろ

女寅指教　女童子教

一只勝手るゞ扱み
貴ゆゝどゝ
きとゝてよとゝ
一宮婦ゝ
ゝゞ

そうじゃ
いくらうとも
一寸の見いあるう
ちの宝所海
の内の別ちぞく

特続
天皇
まつりごと
きふくの
白ぬの
衣かとて
あまのかぐやま

一智恵の見万代
の宝命孫の附い
視うちとうじん
一句式はしまい
ざれぢ義色義

柿本人麿
あしびきの
ながながし
尾の
ちぐろとの
あぐくしよ式
ひとりかの秋ん

ゆ
ゆ
ゆ

素人のゝ貞女
の名ハ有るとか
一歳乃今を横
といへどもんの虫
なるゆは出るど

中納言家持
鶯のなきせか
そ〜ゆ
をく霞乃
ちるき紙
新うそよけ

一同脇つゝろ
あそび姐姫を婦
妹ゝごくもべ
一ゝちとをどる
ゝゝゝ公ざーと

安倍仲麿
あまの原
ふりさけ
見まハ
かもかなる
三笠乃山ろ
いでゝ月ろも

はくもんべし
一姿いと口くふうぢを
学まつ〜おいを
くにおとろふ
一幼時ゑ知ふ

壺撰法師
我唐いうやこの
学ふを
しうぞ
すむ
ゑ紙うちふと
人をいふう

とせぶれぞを
く物をたうひは
一枝よ地知ふう
ひく事かれ縫
針よ点る附うれ

小野小町
花の色いうう
けりか
いたづらふ
我身よふ
なるめ
せ〜ふふ

蟬丸

おぼつかなこの
ゆくも
ゆくも
ゆくも

学ざるべば家を治
事あるべ
一文字海ふといく
代管弦うれば弟を
ろうるにようぐ

僧正遍昭
天津風雲の
かよひぢ
吹とぢよ
しをりすべ
をとめの
姿しばしとゞめん

一姑よ成てよめを
ぞ嫁を男
姑代やまい
一富る家よろづ
とゝのもかぐら

湯殿院
はくたくの
岩より
落るなる
乃川
高そつりて
瀧となるぬる

あるものをうれ
一貧しき人乃
妻となりゐやと
清潔をこの愛へ
一父母い天地を

河原左大臣
みちのくの
もろのふちの
雅ゆうり
こゝ秋をあみ
戒をあらく

ごゝ男姑を
月日乃ごとし
一まを孝をんだ
君はごゝ如を
程し後者のぼ

光孝天皇
君が孝光
君の如
いそ〳〵
ゆうれつひ
戒衣をに
ものはゆうほく

中納言行平
きちりつを
いるたの
ムラ岩よ
ゆふか
まりとたば
今ろうこを

一文毋よりの勧タに
巻とをし男姑
ふい茶ばうのまつを
一夫婦爭ひ情る
ゆ形れ理とを

在原業平朝臣
ちやゆる
紅代も
きうと
竜田川
りうまるよ
ゆうぶとい

ぎく文よ流へ
一姫みちうやまひ
とかし宋姫よ
色の仙源うば
一女として歌わ

茂系敏行朝臣
住吉の
岸うち
よるなこ
とかさへや
夢のかよひち
人めよくらん

らねい岩本の情
うれよ美なしず
一嬢として春乃
ゆうれい名をご
とのふ実明沒

伊勢
郷波うこと
うきあ
しの
ふしめも
なつぐこの
とぐして
よしや

一三九坂とちりを
はらちまどんい何で
天乃陸をすねたん
一四息を絶ずるん
なんび推ら八若

元良親王
まびめまい
今ちと
物かし
なふは
ある
弟とたっても
めんをぶそう

乃弟とたりん
一如い地獄の住処
よくなりけれ種
子成寺の
一面い善薩り

素性法師
今こひと
いひ
ちろよ
出月の
乃月の
乃月を
まちかつろう

文屋康秀
吹うちに秋乃草木の
しをれるむしの
あらしといふらん
大江千里
月見れば
ちぢに
物こそ
かなしけれ
わが身ひとつの
秋にはあらねど

菅家

此きびを
ぬきも
とりあへず
ゑ向ふ
ゐ梨のかき
神乃まふく

親をうゑまつ
一我身をかざる
おこゝんよりの先
まづ衣をすけ
一他の素丸神乃

三條右大臣

名ゆをうく
あのさう
ゑのの
さとぐ
人よまこまぐ
ゐ面よりもゐれ

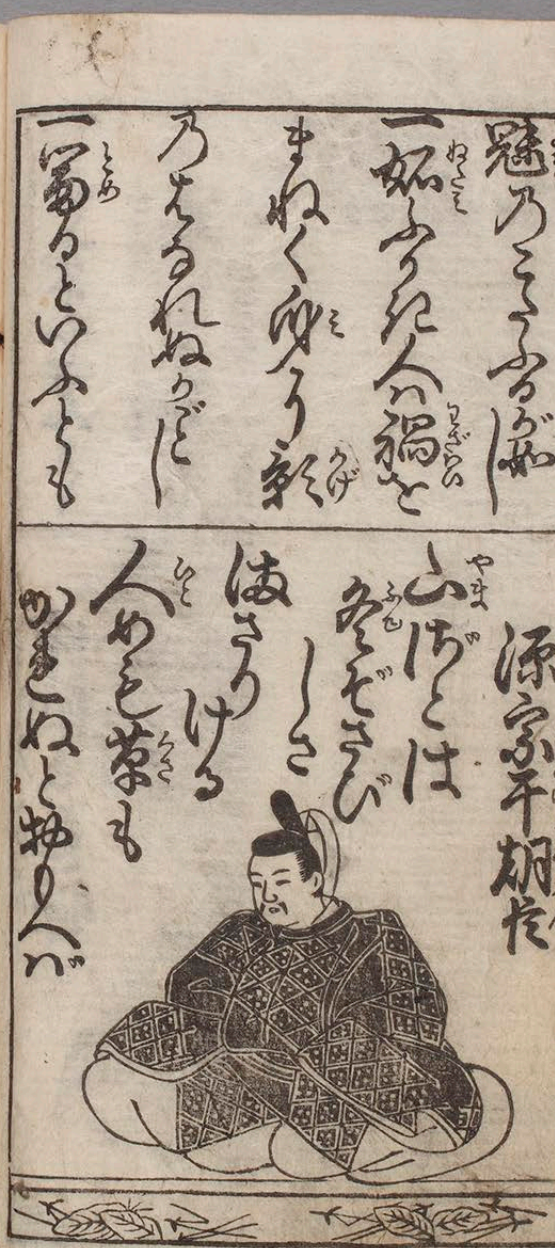
とゝていとづゝん
ゆきゝうもべゝ
一地乃まれゆき
とうんていとびう
まをいさもべゝ

貞信公
小倉山ゝの
ゝみぢだ
ゆあらば
今一度のみ
御幸まちけん

一吾事とうんゝ
ゝ迷ふを思ひを
のんでゝ我身と恨
一情ゝ人ゝ極
とうゝ恋ふ木

中納言兼輔
みゝ乃原
わたて
なつ乃
ぬづゝ川
いぢゝきゝてう
ゝゝ乃ゝん

貪とこそ賊
さ人をも後の世
一武い始る業人浴
おろろ人家いたんふ
安く後の絶ること
九河内形恒
ひのくに物
がや
神君
をきき浦
白菊乃され


源家平胡
ふげとは
みそぎさび
しさ
海さうけ
人めと業も
のまぬと物し人び

一それ智勇くゝ豈
あるハ績つゝしぎ
縫たるの業
一又学ばずして能
とるハ債書糸

壬生忠岑
あるのつを
なく
ハ
つ秋より
あるはさぐるを
うゑ拍いかし

竹敷島はみら
一但ふるゆして
注あるゝ又ふり
ゑゝ狩あり
一方式し家業と

坂上是則
朝ゆゝ家
有明の
月と
ゝるまてふ
ゝ山里に
ふれるゝ雪

春道列樹

山のゝ風の
うきをうか
ちぐらみい
なり秋もあへぬ
うきちりの香

僧正遍昭

たゝの秋の夕ぐ
一嫁くいをうつふ
ちぐらびし老くい
ゑてはつゝ

紀友則

久かたの
ひかりの
のどけさに
雲乃日ふ
しづこゝろ
花のちるらん

一見女は三度うち
分おつるまで忘
れぬ事なりき
一吏よりたるのは
前よりは恭みつく

菅原與風

雅をうしも
志れ人ふ
高砂の
松もしれ
ぬかくれ

立事とせざれ
一貴うる人は舎
人にて召使事
わづか数くらけよ
一多とかさあまと

紀貫之

人をいざなふ
志るべ
なるけとい
花ぞしれ
春にあひ
ける

清原深養父
夏の夜は
月かと
見るまで
月やどる
雲のいつこよ
月やどる雲
文屋朝康
白露に風の
吹しく
秋の野
浅茅ぬきとめぬ
玉ぞちりける
三宝よい三ゝひ
礼とす神ぬと
二度拍とべ
一五淡とる河わ
四拍ゝ社とる

ろ時に深く敬人
一宮寺ふまつぶる
時にをぐうれ
をぢ者ひだ
一円外の書とれ

右近
忘るるの
身とと
ちくば
捨ひて
人の恋名
ばくれも有れ

あつらひていれろ
捨るふてべるす
一宮人ようあひ
しらひ文ゆは
ようぢりまれば

参議等
あさちふの
をの
去の糸
思ふまと
なまりくかどう
人ものあひれ

平義盛

あつまてを
ものに出よ
りの
ちひを
物やすりつを
人のとつ法ぐ

一婦人礼とも
ちすれば男姑
り義あると
一嫁ちく礼義
かれば父母

壬生忠見

恋とても
ちる名い
まさに
立よりり
人まにても
ものしろめし

名をくだるのき
一人のうり仕て化
云といんざれ事
潤ゝ早咽ゝべ
一何よ姉さてる衣

清原元輔
賛きれうる
神代
きりうけく
すぎの松山
なみのさゝとは

生ふたがるどいろ
罵詈のなり秋
一枝ちるさ女を
ふかし粧女の色
けゝひゝるゝがゆ

中納言敦忠
あひみてゝの
後乃心
よ
ゝふきだ
ひゝなりの代
なのはざるとろ

一悔る女い酒ゑこ
ろむ拵女れ家を
歌ゞおゞやゝ
一あづゝれ女いわや
うれるゆきいさぎ

中納言胡忠
色ごとの
ゆくゝて
なるゝふ
人をも身をも
うゝみぢゝま

よゝ奥女ろをもゝ
一祝さ女い家と活
ゆゝゝとゝやう
み勸受ゞ
一初い掴ろあゝ

謙德公
氣ゝもいゝ
ゞゝき
人い
物もゝで
身のいゝぢゝよ
うゝぬゞさうれ

出でゝ
みるも
一身に
あり
勤め

曾孫好忠
ゆゝしき
人の
ものを
ゆゝ
恋のうたの

一男に三法を
て迷ふ
かゝる
一女に三所
あゝ

恵蓮の法師
八重葎
宿の
人
あさい

源重之
風流いつこ
岩つつ波
ゆれきの
ひろ
くてけく物を
おもふころかな

つゝ
ゆ
一りのいつゝ
ゆ
ゆ
ゆ

いつく笑を服立
ゆふも甚恐べし
一ひとゝび笑を
ゆるしていせの濱
ゆ古代人

蒲原義若
あらがたの
をゝ
ばう
表
なぐもがれ
わりひるゝ

一白強い人とゆわ
て名を萬能強い
人を侍く物を
一福と福ゆ門
ゆ一寸ぐ人のま

蒲原宝方翁
ゆ
あゆ
いぐさの
さうぐさ
けもゝぐ
ゆ物りひを

ねくあるよあり
一天乃笑ひまね
うつうつあり自れ
笑い通ひ
一そまい舌を行よ

嚴系道作物語
明わまび
くるる物
ちう
なぜうなれ
わさはゆうれ

家ふれ
ゆ作りあり
一又兎とうる家
ゆいつぎうひ物
あまりの楽

宮内物道編
歌きは
ひるを
ゆるよの
わるまい
いふ久し
ものこと
しれ

一人ゝゝゝ孫乃
漁を行へるゝ
陽丸姉あれ
一夫ゝゝて外を
つゝあい女い内乃

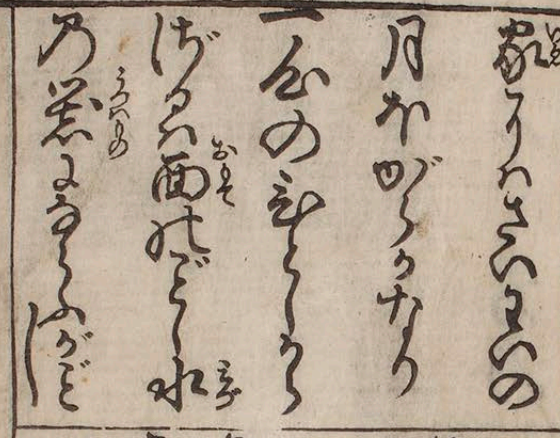
儀間三司母
ひとゝゝゝ
ひ米ま
でい
呼られで
あをうぶり乃
命ゝもうも

嘗とうとゝし
一信ある人ゝ門
りい笑乃雲た
形びくるゝし
一意煩ある人乃

大城言公は
流乃者は
学ゝて
久ゝく
かわれど
名ゝをうゞ残ゝ
なゝ代きゝゝれ

和泉式部
あくがるる
この世れ
かうの
とひ出よ
今ひとたびの
なつかしもがれ

紫式部
めぐりあひ
みしやそ
それとも
わかぬまに
くもがくれにし
夜半の月
かな



紫うちかさねたる
月かげかな
一ふの
げつ面ぞ
乃ぞ

一他の男とかたらざるを他の女をしらせざるを

一姑をあるをを

とりんくよあり

大武二位

有るよ

いるれ

風俗が

いくらよ人を

ひとをやいする

いまゝあとせよ

一嫁乃れなし

こゝ式半嫁れ昨

とすべし

一若ん法たりて

赤深湯門

屋ちそ

祝るまを

ちよ文く

うとくまで

月式

ろ

幸と義兵衛と
物ゝ哀ひ
一若人い所〻
笠と出し兵人い
所して幾と殘と

小武郎門侍
大江山い〻
ゝ乃
と成れの
俺ぐふこも
わま乃ゝ

一貴紀人の素と
ゝ乃ゝも袴者を
あかどるゝみれ
一よ紀人ともあ
ゝふ笠ゞまよゝ

伊勢大輔
いあ〻乃
宗良の
八重桜那れ
ゝ乃ゝ
匂ひゝ

ぬ人の祝ごと合
一家よりこれ祝
法と同まみあつ
ていかぐ色紙とく
一男ふ家ていた

清少納言
和をこめく
ものそう
けるとも
よふあふさりも
実をゆるさ

うとふ法しい姫よ
あしくい姫よ法く
一親類よりくらる
たをとく恋歌あ
らんぐるあなり

お茶道雅
今ちきく
物しいえ
あんと
ぐるを
人づくなって
いようるる

一女いこ界ろう家
のまつまの家を
家とるとり
一見みとおりん
ぐりうをんが家ど

を紀然ゑべ
一貫を用て天と
親が如く汁を用
て地をさしよひと
一神い無人を得

前大僧正行尊
をもろともに
哀と思へ
山ざくら
花よりほかに
知る人もなし

若しむふ此
どこ〜さんぐ為也
一所道学を戒
むるの無しよ此
ど虫ろ〜ちあんと

周防内侍
春の夜の
夢ばかり
なる
手枕に
立ちし
名こそ
おしけれ

一生れ子ごろ
ちまろ
ちまろ
の姫
勤くゝ
一貴さ
しやうん

三條流
ゝをゝ
うゝ
ゝ
ゝ
ゝ

おごるゝ
一富
ゝ
人
一食

紙田法師
嵐如く三宝
乃
ゝの
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

んあるが富る人の
はつたるを
一邪うする女をめと
きは家代はほろ
びるよをうるぞ

良遍法師
ちびーさに
富代立
出く
かうしきび
いつまもあれば
秋乃ゆふ秋

一ようき女代
めとれば家業の
ゆよ程の
一夫よ法ざる女
をとる事里り

大納言經信
夕さまい
つ田の
いなば
ねとつきて
あれまろやか
秋乃ゆふぞら

春ふかき
さとり
みな
演乃
わさ
うさ
かあり
や
紬の
ゆれもこそすれ
結び目親王家紀伊

久方の
一和ぐるかとも
だめんとすれい仇
を逆て置るの色
一ゑよ組をとく

前中納言定房
高砂のおの
猶乃
ゆくへ
ゆ久り
とやまの
さくら
さくもあらん

頼朝卿の愛猫
の人よ捨ざるごと
一心をけがさそ
和らなる例名
の人よるべし

源後朝臣
うめるとけ
人をそろ
その
ひとり
そ
いろね拍と

一善人よ捨ひて
るれば麻の中乃
よりだのごと
一悪人よ
そ出れる藪の

義原奏後
奏を記
させ
りが
紙命
あい
れ
れもいねり

中ろいぎゝのじ
一親よりゝ姉ゝ
分くもうこつむ
ぎ縫針とすく
一生つき長ゝと

法性寺入道前関白太政大臣

わゝのたゝ
あだ出く
ゝれい
久ゝゝ乃
ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝゝ

いゝ代おゝゞとの
づゝゝ利とゝん
一ゝゝ月ゝ一針
なゝゝゝば三百
六十針

崇徳院

瀬をはやみ
岩に
せゝゝ
滝川乃
ゝゝゝゝ
われゝゝゝそゝゝ

一ひとさとの絵びと猫ひ一端仕立
まこが膚と鶴と
一ゑと交れ師とも
踊よ志ぐさ流や

源義昌
演踊者
ひとふ
ふ者の
なく変ぬ
いく秋称さめぬ
ずまれ実りり

茅野人ろとや
一結巻婦い姑の
ふふふと壷て
榴をとれ人
一京伯の母崔氏

左京大夫弘猫
秋風よきか
ひく
もの
あまよう
ゆき出る月乃
四季れさくさ

待賢門院の
出ゝ
ゝ
ゝ
ゝの
みぐれ
ゝは
ゝ

九重をゝ
一期ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

塙徳大寺左大臣
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

一夕まいおそく寢
くるを法をぢあんの
ぢーやくんるとおもふ
一不常とは世まつ
ふとろい辭うく

道圓法師
物のむこびさくも
あいあるものを
うきにそこねい
なみさうけを

ぢんしん成名ふがごと
一義理をうれれを
肖いよ孫ぢ乃
畜數ふえ
一女九酒母辭も

皇后宮定子崩後成
世乃中
よ
ちとも
みなき
ぢのいる
ふのとくふも
廉をなくうる

足若しく舎人の俗
ゆるもたち角性
一紙惜ざれい眠
とせび分安られい
おごりとなせ

菊原清輔朝臣
かうくいまと
ひころや
思ふを
うしとそ
今ハ恋しき

一恭公の后伯姫
を苦義とちり
く燒失ひぬ
一鄭猶ハ行義と
孔子ひて法ふま

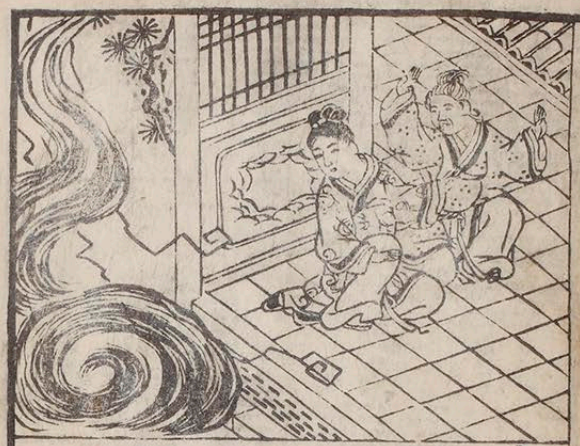
僧惠法師
秋しとぬ
ねもと
ころハ
年ぬ
稲やのひまさ
はまをうとり

人は位よりあり
一関氏の女い者は
志ゝ〻姑の面服
と称ずして治と
一張氏の妻い者は

西行法師
なぐさとて
月やいは
物ぬ世もい
とる
かこちがほなる
ものうきぐうか

嫉妬と貪りを
受て姑を敬ふ
一顔涂塗の妻い姑
ふ孝と云て忍
雷公の難を逃ぬ

庫蓮法師
ひとりあの
寂も
まさびぬ
桂乃葉よ
きうさちのかる
秋ぬ夕ぐれ



皇嘉門院別当
新波はしめの
叩り称名
一枚史
分を法くてや
恋ゝ法ゝ

一ゝまゝの婦人を
みか屋敷ゝ
城はゝゝ
一義を守り者を
はくゝく名を後

武子門親王
王の法よりまゝ
ゝゝのかゝゝ
思ゝるゝの
よゝ
もゝ
すゝ

代よとぞめ給へり
一緋袴をひき帯
をとりしも忠孝の
志ゆゑなるべし
一又物を縫糸を

月をたやす
をゝばの
あまの
袖ぐちも
ぬれまさる
ぬれ
色はうつるど
殷富門院大輔

つひぐもんう
節義をもるべ
一女ある人は綾
くれども面をと
ゆゑ人よまどる

こはそうぐやうさのだいじやだいん
源重相坂の和尚合
きるもくるとなくや
霜枝の
さびしろよ
衣町ゝ
ひろうも稀ん

一思なる人いきつ
とけきた袋乃ぬ
にいやしめらる
一文の思い須弥山
けしとく毋乃涙を

二條院讃岐
我袖をたゝ
ひよ
ひとゝね
沖の石乃
人こそたゝ
かたくまもかし

巨なる海のごと
一思とうをそ思を
たゝるゝ木れ多の
枝と枯とひと
一雫とぬゝゆゝく

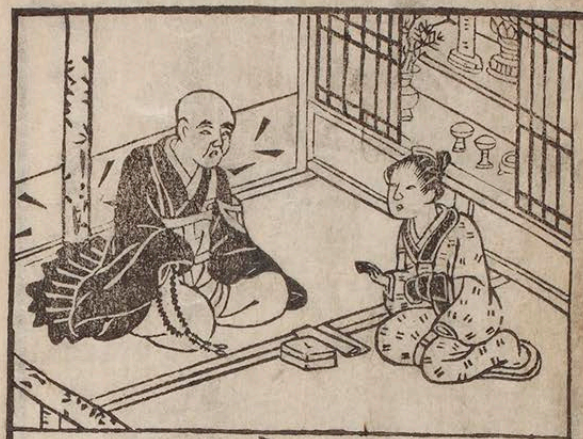
源俊頼大臣
世中い
ぬ
ぬとなみ
法おく
あまの小舟れ
つゝぐ乃出

徳とおもはぬ野の乃
麻の茎を換よ法と
一宵をる女い二歳の
為僧を待ってよ
第よ命を法て布施

叡義雅經
みちの乃
ふみ
秋風
さよ更く
ふるちとさしく
衣うつなり

一部とり丸貪女々
又母乃夏祭とて
寺ゞ一つの衣よ命
法とく仏供養と
一南紙紫ゞ女い又

崇大僧正慈圓
おもかげ
うゑ世乃
民ふ
世ふうか
我身乃犯よ
すそあ丸袖



入道前太政大臣

花さそふ
あらしの
庭の雪
なれば
ゆくへも
しらぬ
わが身
かな

乃治を慕く庵と
ゆく春とつむ
一徹妙い生を流の文
と慕て白拍子や
ゆく行情と歌

権中納言定家

あぬ人を
まつ山の
浦に
夕なぎに
焼くやもしほの
身もこがれつつ

一巻ある人は作
の懸ようて死を
懸どとゝいふ所
一生死の命は常
うゝ次第に暮れ

正三伝家流
風体ゝ
なるの
小川の
ゆゝしきい
みうれを夏の
ちゝゝうける

ゝ式ゝ
一炊夢の外は浮
ゝゝすゝやふ
浮ちと形へべ
一脇へべきい恨

後鳥羽院
人もをし
ひゝを
ゝゝめし
あゝれなく
世をとゝゆゝよ
物ゆゝ分は

男うり會りのい
うとゆく末若くみと
一恐るべきいとつの
巷也生る者い
死とる末世者

順德院

百姓や市ある
き物湯の
ちのぶふも
なれあまりなる
しらかるなる

一命いとげろふのゝ如くに生れくゆふあさに死
一分い樣の花のごとく日出ると結てあすを待
一綾錦のよそほひ金湯は世のさいふあるど
一金白銀の光ぐひ角ぐ世ざろう乃寶うり
一瀧ときいめ分とのぐるい夜よ仏乃ゆ御よりゝ

一やごとなき人の寵をうけもつぐ現世の楽しみ
一松竹乃契をとゝぶらてもの命消るふ程なり
一鶯鶯乃衾枕ともあくるもあくるもきらぬ
一女誡の七章といひく女子いましめ七ツあり
一早弱とゝいふ我身を堪忍なりとゝ和らるゝ
一夫婦といふて地ふ[illegible]く[illegible]遠ざるゝ
一鼓琴といふ物ふく情ふ紙いふなり
一婦行といふ[illegible]ぞ[illegible]く[illegible]ぶく揉とゝるゝ
一雪月といふ[illegible]を[illegible]て男姑ふ[illegible]ゝ
一曲尺といふ己が程を曲て夫ふ[illegible]ひたりゝるゝ

一和如妹といふものゝ姉妹小姑に親しくするとき
一男を情と義とを通りて恭順の心深うすべし
一朋輩に施せば善悪のこゝろあり
一貪りきらひの心を慎まざれば家業善悪の違あり
一色〻に家にはきたくはげしくさかうんで

一他の施しとうる者は法華の仏代はるべし
一いよわきにて猶小施せば功徳大きなる道理
一男のるみて事あに於せば結とわるる愛を
一水を飲て廟をまつるべし仏乃五体のごとく
一花を持て佛を供するべし速に菩提の果をのぶる

51459

一一念十念乃かい始始まの法ゆとそぐも
一如法華經の開法ゆ二千界ゆ宣ゆ法ゆ
一上ゆ若養ゆ一ゆ中ゆ法ゆ
一下ゆ遍ゆ數ゆ法ゆ
一如ゆ人ゆ

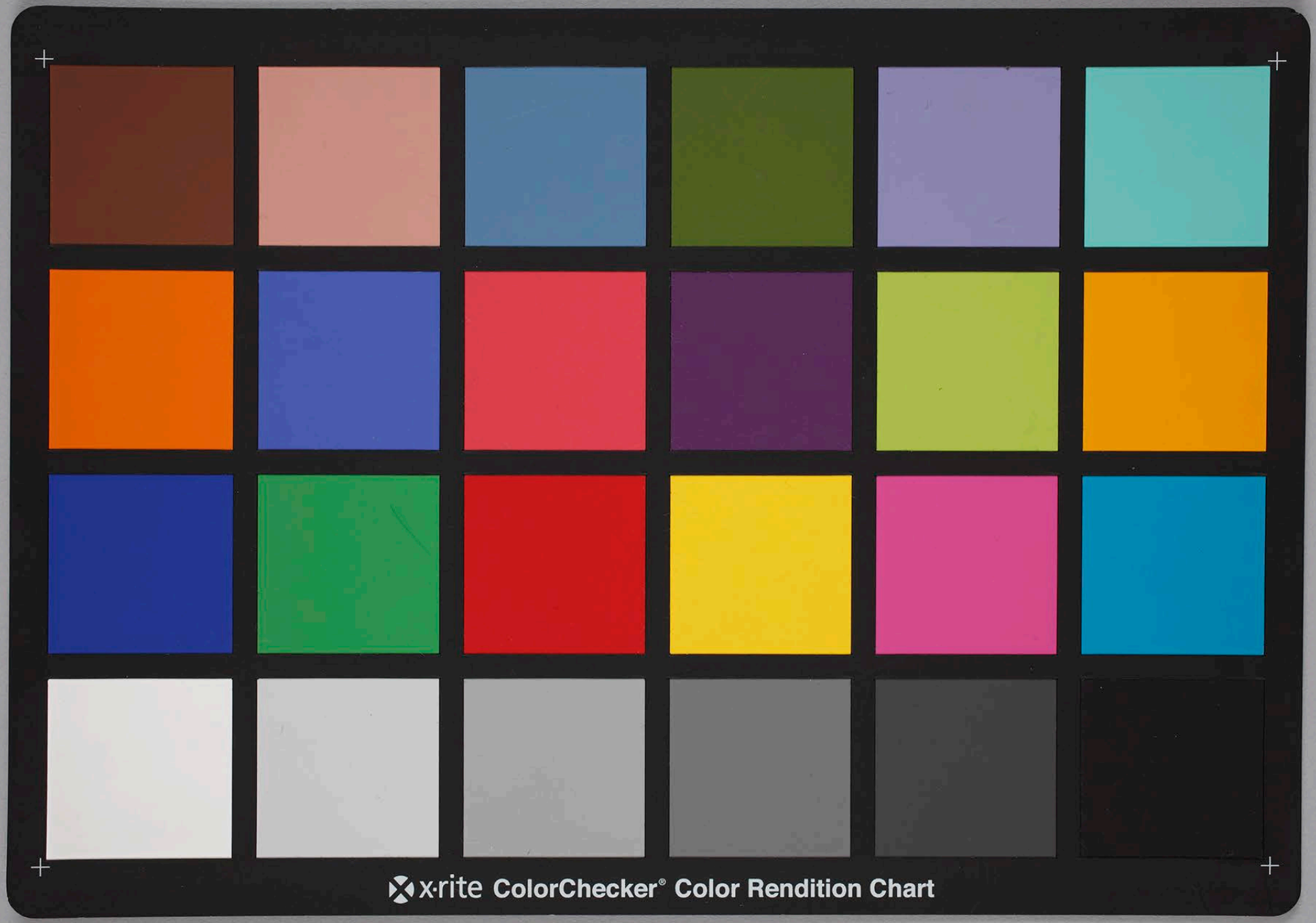
一乃ゆ人ゆ如ゆ法ゆ人ゆ事ゆ

女實教寺子教終

書畫一筆　洛西住　下河邊拾水

安永二癸巳年三月

京町　庄兵衛板


x·rite ColorChecker® Color Rendition Chart